



2015年(平成27年)

4月号(No. 839)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

行動する者たち

「山の日」に向けて願うこと

春4月。始まりの季節だ。冬を乗り越えた里山の木々たちは間もなく一斉に芽吹き、光る緑で私たちを包むだろう。2015年、日本の山の世界は、来年から実施される「山の日」をどのように実践したらいいかをめぐっているいろいろなアイデア、発想が飛び交う1年となりそうだ。中にはビジネスチャンスと考えて手を打つ人もいるかもしれない。私たちは、思いがけず得たこの祝日で何をしようとしているのか。行動する者たちを追いつながら、日本の山と人の風景を考えた。

零下60度の犬ぞりレース

1600kmを完走!

登山ではないが、「挑戦」という意味では共通する要素も多い、極寒の地に住むひとりの日本女性の話から始める。4月4日の朝日新聞夕刊社会面に「犬ぞりレース1600キロ完走 本多さん日本人

江本嘉伸

女性初」という記事が満面の笑顔の女性のカラー写真とともに載った。カナダ・ホワイットホースに犬たちと暮らす本多有香さん。今年「世界最大の」と形容される犬ぞり長距離レース、アイディタロッドに出走、見事完走したのだ。アラスカのアンカレジとベერი

目次

行動する者たち～「山の日」に向けて願うこと・・・	1
東京で全国「山の日」フォーラム山岳5団体のPR出展にぎわう・・・	5
山研新管理人からのご挨拶・・・	5
東京多摩支部・5年の歩み「自分たちの支部づくり」を楽しむ・・・	6
第3回小島島水祭開催・・・	8
110周年記念事業(極限探究登山部門)	
「ガンガブルナ北稜登山隊2015」へご寄付を賜りました皆様へ・・・	9
活動報告・・・	9
資料映像委員会／科学委員会	
自然保護委員会／集会委員会	
図書紹介・・・	12
図書受入報告・・・	13
会務報告・・・	14
新入会員・・・	15
Climbing&Medicine・67・・・	16
ルーム日誌・・・	17
会員異動・・・	17
INFORMATION・・・	18
編集後記・・・	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

ング海峡に面するノームを結ぶアイディタロッド・レース。例年3月第1土曜日スタートと決まっているが、今年は雪不足で、土曜日の3月7日にスタートできず、雪を集めてコース作りに費やし、結局2日遅れの9日、フェアバンクスに移動してのリスタートとなった。通常なら1800kmある距離は少し短くなったが、この大幅なルート変更でマッシュャー(犬ぞり使いのこと)と犬たちは、ユーコン川の氷上を長く走ることを強いられ、結果、長時間とてつもない寒気に襲われる羽目になった。スタート直後は気温も高く、砂利の上を走らざるを得ないほど雪がなかったが、途中から様相が変わった。フリースリアという場所ではアイディタロッド史上最低気温のマイナ

ス60度(計測不能状態)というとても低い低温となり、犬も人も凍傷を負った。本多さんは「ほとんど犬やマッシュャーが凍傷になりました。私も指先と顔が……」と伝えてくれた。

本多さんは、はじめは自分の犬を持てなかつたため、トレーニングでもレース本番でも苦労した。いまでは自分のケネルを持ち、自分の犬たちがいるので、「以前に比べ、余裕を感じる」(マッシュャーを取材している佐藤日出夫さん)という。

結局、トップから4日遅れの3月21日18時過ぎゴールした。16頭でスタートした犬は、途中のチェックポイントで少しずつ減り、ゴール時は10頭になっていた。本多さんは岩手大学の学生のと



ゴール後の本多さん(撮影=佐藤日出夫)

き、カナダのイエローナイフを旅して犬ぞりの世界を知り、うれしそうにそりを引く犬たちに強く惹かれた。就職してからも、犬ぞりをやりたい！との思いは消えず、ファクスを出しまくって雇ってくれるマッシャーを探し、25歳で会社をやめて単身カナダへ飛び込んだ。ベテラン・マッシャーの下働きをするドッグハンドラーになったが、給料はほとんど出ない。ひもじさと戦いながら、マッシャー修行を続け、06年、日本人女性マッシャーとして初めてユーコン・クエスト1600kmに挑戦した。07年、09年と3回は犬のアクシデントなどで途中リタイアしたが、12年、自分の犬たちを得てついにユーコン・クエストを完走、そして今回、もうひとつの大レース、アイディタロッドも完走したのである。出走78チームの中で55位だが、本人は満足。そのうち上位をねら

うそうだ。

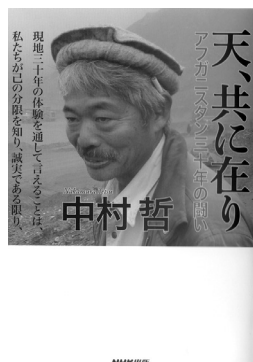
1600kmといえば、東京から沖縄までの距離だ。それを12日ほどで走り抜くのだから驚く。本多さんはいま42歳、カナダ・ホワイトホースの森の一角をチェンソーで伐り拓いて建てた小屋に、26頭の愛する自分の犬たちと住む。ビル管理会社で清掃を仕事として、犬たちの餌代を稼いでいる。

地平線会議というネットワークの中で、いろいろな冒険者に会ったが、本多有香さんのように身ひとつで自分の目指す道をまっすぐ進んでいる人間はそうはいない。

中村哲さんに

梅棹忠夫山と探検文学賞

3月26日、今年の梅棹忠夫山と探検文学賞が、後援する信濃毎日新聞紙上で発表された。11年に始まってもう4回目。国際山岳年日本委員会事務局長の仕事をしたとき、梅棹忠夫さんに特別顧問を引き受けていただくなどのお付き合いもあって、私も選考委員の末席にいる。事務局から上げられた今年の候補作は6点。『裏山の奇人』（小松貴 東海大学出版会）、『祈りの大地』（石川梵 岩波書店）、



表紙はアフガニスタンにいる中村さん本人

『北極男』（荻田泰永 講談社）、『天、共に在り』（中村哲 NHK出版）、『今西錦司伝』（斎藤清明 ミネルヴァ書房）、『天と、走る』（本多有香 集英社インターナショナル）だった。本多有香さんの初めての本も候補に選ばれている。

長い審議の末、中村哲さんの著作に決まった。医師として、アフガニスタンで医療活動をするうち、1600本の井戸を掘り、25kmの用水路を拓いた中村さんの文章は胸を打つものだった。ペシャワール会の活動などでマゼサイサイ賞、菊池寛賞、城山三郎賞をそれぞれ受賞するなど、すでに十二分に高い評価を受けている人だが、それでもこの賞を差し上げたい、と選考委員たちは考えた。何よりも、梅棹さんにふさわしい。

「私とアフガニстанを結んだのは、昆虫と山である」と、受賞作の中で中村さんは書いている。

1978年、福岡登高会のヒンドウ・クシュ隊に参加した中村さんは、10歳のころに昆虫のとりことなった人である。ヒンドウ・クシュ山脈の北麓のパミール高原がモンシロチョウの原産地とされていることに強く惹かれていた。しかし、いまはそれどころではない。「この国を根底から打ちのめしたのは、内戦や外国の干渉ばかりではない。最大の元凶は2000年夏以来顕在化した大旱魃である」と、中村さんは指摘する。

そして、受賞決定を伝える同紙の電話取材に「世界中でテロや混乱が続いているが、目先のことでなく、自然と人間の関係を見直してほしい。梅棹さんに憧れていたので光栄です」と答えた（3月26日付同紙）。

授賞式は6月4日、長野市で。なお、梅棹忠夫山と探検文学賞の第1回受賞は、角幡唯介さんの『アグルーカの行方』（集英社）。第2回は中村保さんの『最後の秘境 チベットのアルプス』（東京新聞第3回は高野秀行さんの『謎の独立国家ソマリランド』（本の雑誌社）である。

少し追記する。この賞の話を初

めて聞いたとき、なぜ長野で？と訝しく思った。梅棹忠夫といえは民族学博物館「民博」の誕生に献身し、長く館長を務めた人だ。当然、京都の人たちがコアになった賞であるべきではないか。しかし、山岳地域の長野県に愛着を抱いていたこと、そして、斉藤惇生・元日本山岳会会長、石毛直道・元民博館長のお二人が「顧問」として参加してくれることになり、納得した。選考委員長は、小山修三・民博名誉教授である。

梅棹さんは晩年、目が不自由で自身は登れない身ながら、強く山への思いを意識され、日本山岳会の名誉会員（会員番号は3963番）であることを誇りにしておられた。02年11月16日、大阪で朝日新聞と国際山岳年日本委員会の共催で行なったシンポジウム「山との出会い——百名山が問いかけるもの」に私が聞き役となつて講演していただいたことがある。その際、日本山岳会のネクタイをつけて登壇されたので、そのことを壇上で指摘すると「よう気がつかれましたな。これは日本山岳会のネクタイです」と、満面の笑顔になられたのが懐かしい。

「縄文」と「山の日」

3月29日、東中野の映画館「ポレ東中野」で「縄文号とパクル号の航海」を見た。とてもでないでキュメンタリー映画である。

探検家で医師、大学教授の関野吉晴さんが教え子たちとともに千葉の砂浜で120kgの砂鉄を集めて斧、鉋などの道具を作り、それらを手にインドネシアのスラウェシ島へ行く。島のマンダール人の助けを得て54mの太木を伐り倒し、丸木舟を作り、「縄文号」と命名した。この舟と「パクル号」と名付けた別の舟との2隻に日本人4人とマンダール人漁師6人が乗り、風と帆と星を頼りに3年がかりで



台湾を出て、西表島を目指す縄文号(撮影=佐藤洋平)

日本の石垣島に到達するまでのドキュメンタリーだ。途中、東日本大震災があり、医師である関野さんが日本人クルーを連れて被災地を回るシーンもある。

映画上映の後、関野さんとゲストとの40分のトークがある。この日は40年来の友人でもある私の出番だった。

よくぞ、あそこまで徹底して自然と人力だけを頼りに航海できたものだ、という率直な感想から始まり、電動ノコもいっさい使わずに巨木を倒し、くりぬいてカヌーを作ったこと、向かい風のときには「時速2km」の超スロー航海の感想、最後、強烈な南風を背に受けて2日で300kmも疾走したときの興奮など、映画の内容についていろいろ話した。私はこの映画を試写の段階から何度も見ているが見るたびに、すごい、ここまでやるか！と思わされる。そして、必ず新たな発見がある。

対話のさ中、思いついて観客の皆さんに「山の日」のことを伝えた。前日、丸の内で開催された「全国『山の日』フォーラム」を訪れた。それなりににぎやかだったが、関野さんたちがやってのけたこのドキュ

メンタリーが描こうとしているものは、丸の内のイベントより「山の日」の考え、思想を強く深く表現してくれている、と私には思われたのだ。

来年、2016年8月11日から祝日「山の日」が始まる。いろいろな行事ができるだろうが、私自身が考えている「山の日」の思想とは、関野さんが今回やってきた行動と深く関わっている。自然の材料でものを作り、自分の力で移動すること、つまり「山の民」であることを自覚すること。

「山の日」はこの映画で関野さんが実践したことと深い所でつながる、そのことを覚えておいてほしい、とお願ひしておきます。そう話した。唐突のようだが、前日のフォーラムで感じたことが口をついて出たのだった。

「我々の山の日」

今回の「山の日」の実現まで、日本山岳会をはじめこの運動を推進した方々のお骨折りがどれほどであったか、どちらかといえは離れて見ていた立場の私は推測するだけだ。

東日本大震災もあり、この会報

でも「当面は祝日ではない山の日」の実現が現実的との文章が載った。私も当分「祝日」は無理ではないかと捉えていた。しかし、事態は急に、一気に進んだ。政局が「祝日・山の日」の実現に向けて実に好都合に動いたのだ。

このあたりのことは、日本山岳文化学会の年報『山岳文化 第15号』(14年11月刊)に書かせてもらった「祝日としての山の日は何を意味するのか 山の世界は2年後の実施に向けて何をするのか」という「論考」に詳しい。15ページに及ぶ長文だが、内容の一端がうかがえると思うので以下、小見出しだけ列記しておく。

「どのように山の日は決まったのか」「3・11 未曾有の大災害と『いのちを守るための』行動」「国際山岳年で提案された山の日」「毎年6月第一日曜日を山の日に」「山の日」制定協議会の当初の提案」「山の日ネットワーク東京会議の開催」「政局大変動、そして超党派の『山の日』制定議員連盟」の発足」「8月11日」に決まるまで」「祝日決定、しかし議論は尽くされたのか?」「山の日、ほんとうの課題」「山の日」は新しい思想である

「生徒たちはなぜ山に登れなかったのか?」大川小の現場で考える」

自己宣伝にとられては困るが、山の日に関心を持つすべての人に読んでほしい内容である。

02年の国際山岳年の際に山岳6団体(いまの5団体に加えて日本ヒマラヤ協会も入っていた)の代表、地理学、林学など学会代表が共同して国際山岳年日本委員会を組織し、その名で「日本に山の日を」とアピールした。その運動は結果的に実を結ばなかったが、「山の日」の考え方、意図については当時朝日新聞などで発信し、そして、国際山岳年公式報告書『我ら皆、山の民』で詳細に記録してある。

08年9月以後動き出した今回の「山の日」運動は、「海の日があるのに、どうして山の日がないのか」との作曲家の言葉に新聞社の幹部が共感し、日本山岳会の会長に持ち込んだのが始まりである(その経緯は前述の「論考」に詳しい)。

山の日が意外に迅速に決まり、「広く議論を起こし、周知をはかる」との当初の「山の日」制定協議会の意向は、飛んでしまったかたちである。3月28、29日の国際フ

ォラムのイベントはその落差を埋めるねらいもあったのだろう。

しかし、日本で初めて生まれた「山の日」である。その目指すものこそが、まず問われてもいい。それは、人によって異なるだろう。たとえば、石巻市の大川小学校の現場に立つて以来、私は「山の日」というと、まず「いのち」のことを考える。3・11のあの日、「裏の山へ逃げよう」という一教師の提案は無視され、74人の生徒たちは50分も校庭に整列させられたまま待たされ、あべく10人の教師とともに津波にのまれた。

「山の日」は「個の発想」を大事にスタートするのがいい、と私は考える。大きな組織が何かを決めて地方に指示を出すというのではなく、思い思いに「小さな山の日」を実行する。「祝日」の常識をつくがえす、そんな試みがあつてもいいのではないかな。

昨春秋、兵庫県豊岡市の植村直己冒険館の壁にいち早く「8月11日は『山の日』 あなたの小学校の校歌に山が出てきますか?」という趣旨の山の日ポスターが貼られているのに感心した。そうか。故郷のよさを謳い上げる校歌には、

「山の日」の大事な要素がちりばめられているかもしれない。

「山の日」の舞台は、この国の隅から隅までだ。できればイベント屋さんにまかせず、思い思いのアイデアで山を考えよう。

合言葉は、「我ら皆、山の民」。

注・『山岳文化 15号』を希望する方は、〒343-0807 埼玉県越谷市赤山町2-38-9 日本山岳文化学会 (TEL・FAX 048-962-1295) へ。1部1000円。

春山天気予報 (北ア北部・南部・八ヶ岳)のご案内

4月24日(金)から5月8日(金)まで毎日メールにて、アルプス北部(剣・立山)、北アルプス南部(槍・穂高)、八ヶ岳の3地域の天気予報を、自動配信します。気象予報士は、(株)ヤマテンの猪熊隆之さん。

<http://www.everest.jp/jacweather/> または「JAC 天気」と検索し、ウェブサイトからお申込みください。

Report

東京で全国「山の日」フォーラム
山岳5団体のPR出展にぎわう

成川隆顕

国民の祝日「山の日」の制定を記念した全国「山の日」フォーラムが3月28・29日の両日、東京・有楽町の東京国際フォーラムで開かれた。日本山岳会や日本山岳協会、日本山岳ガイド協会などの山岳5団体も共同ブースで出展し、《山を大切にし、みんなで山に親しもう》と「山の日」の意義をアピールした。来年8月11日からの祝日実施を前にした大がかりな企画だった。シンポジウム、野外トーク



大勢の来場者でにぎわう会場

ショーも、広いギャラリー・ロビーにセットされた50を超える展示ブースは、若い人や家族連れを含め大勢の人でにぎわった。環境省や林野庁、観光庁と、長野県(松本市)、栃木県などの自治体、スポーツ関連企業、山小屋団体などが出展した。

シンポジウムでは、「地方創生・活性化」「山と自然の安全」「子供たちの自然体験」などのキーワードが、各地、各分野の現場から率直な言葉で語られ、質疑応答にも力がこもっていた。

2日目の午後3時ごろまでは天気に恵まれた。野外のトークショーでは、平山ユージさん、片山右京さん、荻原次晴さん、野口健さんらが、国際山岳ガイドの近藤謙司さんとの軽妙なやりとりでステージを囲む多くの聴衆を惹きつけた。

山岳5団体の共同ブースは《山を考えよう》と書かれたパネルの下に「美しく豊かな山を次の世代

に引き継ごう」というアピールが貼り出され、モニターテレビがいまなぜ「山の日」が必要かを訴えていた。動画のメッセージは広報担当メンバーが、デジタルメディア委員会・大塚幸美さんのサポートで仕上げたものである。

間口4m、奥行き2mのブースの半分をJACが使った。残りのスペースを高尾の森づくりの会に活用してもらった。山地にふさわしい森を育てるのも「山の日」の主要なテーマである。高尾山での森づくり活動の10余年を新聞記事や写真で掲示してもらった。

「親子登山の勧め」はJACが始

めたネット展開の活動。パソコン画面を見て興味を示す人が多かった。JACの歴史や特徴も紹介した。入会資格を尋ねる若者が数人いたのはうれしかった。

人気があったのは、今回のフォーラムを機に作ったヤマネの缶バッジだった。リーフレット「山を考える」の動物編で《森の守り神》と紹介した可愛い小動物である。1500個作ったが、みなさんが胸に付けてくれてあつという間になくなった。イベントを終わって思う。「山の日」の認知度はまだまだ低い。夏に向かって、この先やるべきことは山ほどある。

山研新管理人からのご挨拶

元川里美

今年度より山研でお仕事をさせていただくことになりました。

かつて、 TENT を背負っては涸沢へ通っていた頃の私にとって上高地は通過点にすぎず、河童橋さえも渡ったことはありませんでした。その後、本職を離れて上高地ビジターセンターでお世話になること十数年、目の前で繰り広げられる生命の営みの数々に新たな発見は尽きることがありませんでした。そして殊に彼らの、周囲の熱狂も解釈もまるで介さない様子で佇む姿に心惹かれ、自分自身もそのようでありたいと思うようになりました。

今回、上高地でのそんな経験を見込まれて声をかけてくださったと思いますが、これまでの経歴に甘えることなく、新たにゼロから始めるつもりで引き継がせていただく決心をしました。前任の内野さんご夫妻には及びませんが、しばらくの間、あたたかい目で見守っていただけたら幸いです。どうぞよろしく願ひいたします。

The Tokyo-Tama Branch

東京多摩支部・5年の歩み

「自分たちの支部づくり」を楽しむ

高橋重之

■支部会員300人超へ

東京多摩支部が設立5周年を迎えた。2022人でスタートし、5年を経て300人を超えるまでになった。全国支部懇談会、都県分境嶺踏査が支部の結束を強めた。登山教室、山岳講演会の開講・開催などが会員増と若返りにつながった。「手を広げ過ぎだ」という反省もある。思いっきり、山登りを楽しみたい。新しい支部像を求め模索中である。

東京多摩支部は、2010年2月、日本山岳会29番目の支部として発足した。その時点で多摩在住の会員は468人だった。すべての会員の支部参加を願った。設立に賛同した会員が発起人となり、それぞれ近くに住む会員を訪ねて勧誘した。身近に住む会員の多いことに驚いた。と同時に、熱心な勧誘にもかかわらず、現状維持を望む会員が多く、会の停滞ぶりを感じた。支部に加入した会員は20

2人とどまった。残念だった。

設立総会は2月20日、立川市のザ・クレストホテル立川で開き、110人が出席した。総会に出席するだけあつて熱心な人ばかりだった。支部づくりに労苦いとわず働くことを誓った。「自分たちのために、自分たちでつくる支部づくり」をモットーとした。

■結束強めた全国支部懇・分境嶺

総会の前日、朝日新聞が支部設立の記事を多摩版に大きく掲載した。そのなかで分境嶺踏査の企画を紹介し「日本山岳会 都県境の90^{キロ} 3年で踏破 多摩支部発足し企画」と伝えた。問い合わせの電話が殺到。急遽、問い合わせのあった人たちを集め、説明会を開いた。実施に向けプロジェクト・チームを組織した。

日本山岳会は、100周年を記念し「中央分水嶺踏査事業」を実施していた。当時の全国25支部を総動員、また多くの同好会の参加を

得て、北海道の宗谷岬から九州・大隅半島の佐多岬まで、5000kmに及ぶ中央分水嶺を踏査した。踏査日数は延べ949日、参加者数は同5017人。比べようもないが、東京多摩支部の分境嶺は、この延長線上にあつた。6月に第1回踏査を実施することになる。

そのころ、全国支部懇談会の開催が突如として東京多摩支部に回ってきた。第25回支部懇談会が福島支部の主管で、磐梯山で開催された。次年度は宮城支部での開催が決まっていたが、08年6月に岩手・宮城内陸地震が起きた。宮城支部は主管を返上。その結果、「支部設立の勢いで、東京多摩にお願したい」とお鉢が回ってきた。

支部の各委員会からメンバーが参加協力した。お手伝いいただいたスタッフは最終的に47人にのびた。四十七士の努力で9月5(6日、多摩市の京王プラザホテルで懇談会を開催した。全国から172人の会員が参加して、翌日は高尾山で記念山行を行なった。

これら分境嶺踏査事業と全国支部懇談会の開催は、支部の結束を強化する大きな原動力になった。同じ日本山岳会会員といっても、

支部発足のころは、ほとんど知らない人ばかり。それが、共通の目的で活動することによって、お互いを知ることになった。

■高齢化、偏在・固定化に悩む

地域の集まり／サテライトサロンも町田、吉祥寺、立川などでスタートし、よちよち歩きながら順調に育っているように見えたが、1～2年で、もう問題が生じた。支部の行事に参加する人たちの「固定化・偏在化」という現象だ。支部会員の高齢化も一段と進んだ。

11年の年明け早々、若い会員からレポートでいくつかの意見が提出された。幹事会で議論、プロジェクト・チームで検討することにした。5回にわたる議論の後「東京多摩支部活性化のために」を支部長に答申。提言は①広報活動の強化②定例山行コンセプトの明確化(山域、季節、登り方、平日山行など)③多摩独自の自主性を尊重した登山の検討④ポスト分境嶺の検討⑤山に関する講演・講座の開催などを主な内容とした。

会員の平均年齢が、11年1月1日現在で68・6歳であることが分かった。還暦を過ぎた人たちの集まりだ。固定化・偏在化を具体

的に示せば、定例山行などの支部行事に参加する会員が、いつも同じメンバーであるということだ。発足以降のイベント参加者は全体の半数に満たない。5回以上の参加になると、半数の半数。言い換えれば、支部の役員・委員が動いているに過ぎないという図式が浮かび上がった。

答申を受け、事業の多様化を図った。平日でも参加できる会員を対象とした「平日山行」を始めた。毎月、第3木曜日に行なうこととし、第1回は岩殿山で実施した。自然保護活動は、御岳山のレンゲシヨウマや高尾山のシモバシラなどの観察会を中心に始め、一般参加者を公募して、自然の美しさ、それを保護していくことの大切さを知ってもらうとした。加えて、都岳連が実施している御前山のカタクリ・パトロール、東京都が実施している雲取山・石尾根の石積み修復や川苔山での清掃作業を協働作業として実施するようになった。13年には同好会をつくろう、ということになった。幅広い支部会員の活動に、山行、集会、自然保護などの委員会ではとても対応できない。まず発足したのは、クラ

イミング同好会。続いて沢登り同好会、スキー同好会がスタートした。海外登山研究会は愛称「かいとけん」として親しんでほしいと、14年5〜6月にかけて、香港の山歩きを楽しんできた。

■成果を上げた登山教室

「登山教室」は、13年6月に立川市の協力を得てスタートした。3ヶ月・計6回とし、講義3回、実習3回に振り分ける。奥多摩三山に登り、最終的には自らが企画し登山計画を立てることを目標とした。わずか3ヶ月で達成できるわけではないので、この「初心者登山教室」に引き続き、東京多摩支部が独自で「初級登山教室」を開始し、



第1期初級登山教室。13年6月8日、上高地・山研でミニ水力発電を見学

「初心者」から「初級」に進んでもらった。

さらに支部会員を対象とした「登山技術の向上・リーダー育成」事業を始めた。画期的なことだと思った。従来、日本山岳会の会員は、すでに十分な登山技術・経験を有する登山家であって、改めて講習会を行なう必要は全くないとされてきたし、それが山登りのエリートとしての誇りでもあった。しかし、時代は変わった。登山というスポーツが一般市民に広まり、日本山岳会は多くの山登り愛好家を、一定の審査はあるにせよ広く受け入れてきた。その結果、様々なレベルの会員が存在するようになったし、技術があっても、登山に対する考え方も違って来た。支部自らの「会員向け講習会」が必要だと思った。

■多摩100山、奥多摩BCなど分境嶺踏査事業は13回にわたって実施、延べ510人が参加した。一般参加者から11人が日本山岳会に入会した。初級登山教室は、第1〜2期に38人が参加、1期生から9人が会員となった。

平均年齢が古希を超えた、と「たま通信」で速報した。13年3月

だった。それが15年3月には68・9歳に若返った。会員に変化がなければ、2歳進んでいるはず。これを計算に入れると、この差は大きい。若い人たちが入会した結果だ。登山教室の受講生が活躍し、山行参加者にも変化が見られるようになっていく。

設立5周年事業として、いくつかの事業をスタートさせた。そのひとつが「多摩100山」の選定だ。事前調査したところ、多摩地域には、340を超す山があることを確認した。このなかから安全に楽しく登れる山を100山選定する。一般の人たちにも紹介し、多摩の自然に親しんでもらおうと、そのためのガイドブックも制作する考えた。

もうひとつは、「奥多摩ベース・キャンプ(BC)」の設置。支部会員が所有する家屋を利用し、雲取山や川苔山、さらに奥秩父への活動拠点として奥多摩駅近くに開設する。支部会員はもちろん、日本山岳会会員であれば、だれでも自由に利用できるようにする。これを利用することにより、行動範囲がぐんと広がる。奥多摩の自然を楽しんでほしい。

Festival

第3回小島烏水祭開催

第3回小島烏水祭が4月11日(土)、香川県高松市の石清尾山にある峰山公園「はにわつ子広場」で開かれた。森武昭第24代会長と本部役員をはじめ、来賓、全国の会員、四国支部会員ら計121人が出席して盛大に行われた。

四国支部の瀧由喜子会員が進行役を務め、主管する四国支部長の尾野が駆けつけてくれた参加者に感謝の意を表すとともに「昨日までの雨天を思い、気をもませた天候が奇跡的に回復。今回は烏水が好きだった花シャクナゲを植樹した。『烏水祭』という言葉が季語になるまで続けたい。これからもご支援ください」と開式の辞を述べた。

主催者代表の挨拶では森武昭会長が「昨年の式典で講演した際、凍えながらだったのに比べ今年は暖かい。桜も残っている。全国から大勢出席していただきありがたい。烏水祭をこれからも盛り上げていきましよう」と力強く呼び掛け、賛同の拍手を受けた。来賓は、烏水祭創設にご尽力いただいた地元選

四国支部 尾野益大

出の鎌田守恭香川県議会議員、加藤昭彦高松市副市長、尾上昇第23代会長が順番にマイクを握り、それぞれ香川と高松の観光や名所をPRし、烏水祭創設までの苦労話と喜びを披露した。また、午後から開かれる第31回全国支部懇談会で講演する小島家菩提寺の東京常泉院住職・平井宥慶大正大学名誉教授、重廣恒夫関西支部長の氏名も紹介。献花では節田重節副会長、吉川正幸常務理事、佐野忠則公益法人運営委員長、全国20支部の支



挨拶をする来賓の人たち

部長や事務局長ら代表者らが1人ずつ手渡されたピンクのカーネーションを顕彰碑前に献花し、目を閉じて烏水の功績をしのんだ。

最後に節田副会長が挨拶に立ち、『小島烏水』の著書があり顕彰碑の撰文に携わった作家近藤信行氏と過去に沢渡から霞沢を詰めて稜線に立ち上高地へと下ったときの懐かしい思い出を語った。烏水が槍ヶ岳に向かおうと辿ったと推測されているルートだ。記念の植樹をしたシャクナゲ3本は、このほど四国支部会員になった四国山岳植物園主人の山田勲氏の寄贈によるもの。山田氏は植える土地にかなう条件などを解説した後「標高が低いこの公園では山に自生するシャクナゲは育たないため新潟産の園芸種を選んだ。20年余り成長した木で来春はきつと赤い花が咲くはずです」と説明した。

続いて烏水の孫で四国支部会員の小島誠氏による恒例の吟詠。碑文に記された烏水の「山を讃する文」の一節を前に見ながら、長年培われた張りど抑揚に富む美声を辺りに響かせ、聞く人に束の間、感動を与えた。「富士の山」「雪山讃歌」の歌詞カードを手に全員で合

唱した後、四国支部の仁木稔会員の言葉で無事に式典を締めくくった。碑前に椅子を並べての全員の記念撮影は四国支部の今井順一会員が担当。思い出の1枚を残すため何度もシャッターを切った。

予定通り終了後、石清尾山の中腹まで遊歩道を3分ほど登って自炊施設のある広場に移動し、名物さぬきうどんの御接待を受けた。前回の烏水祭で好評だったため依頼に快く応じてくださった地元クラブ、讃岐高松山行会のメンバーによるボランティア。参加したほとんどの会員はにこやかに歓談しながら舌鼓を打ち、期待通りの味に満足した様子だった。



献花が行なわれ、各支部代表者は受け取ったカーネーションを碑前に置いていった

110周年記念事業(極限探究登山部門) 「ガンガプルナ北稜登山隊2015」へご 寄付を賜りました皆様へ

この度はガンガプルナ(7455m)北稜登山隊(2015年3月1日～4月20日、大堀泰祐隊長、飯田祐一郎隊員、森隆博BCマネージャー)に過分なるご寄付を賜りまして誠にありがとうございます。登山隊は現在、登山期間中で、結果は追ってご報告させていただきます。事故のないことを願い、朗報を心待ちにしているところです。

なお、今秋の学生部ネパール踏峰登山ほか110周年記念事業に引き続きのご支援を心よりお願い申し上げます。

*この度のご寄付は、本登山隊参加の大堀泰祐隊長(中央大学山岳部OB会) および飯田祐一郎隊員(日本大学山岳部OB会)それぞれのOB会にのみご案内させていただきました。

ご寄付者リスト(2015年3月31日現在)
10万円 尾上昇、田村護、5万円 小林正典、渡邊雄二、黒川恵、3

万円 山平靖、古野淳、浅香英一、小林良成、嶋津正道、2万円 和田政司、村木富士、大谷直弘、政田範行、猪熊隆之、高野正道、小林敏、小林政志、1万円 飯島正敏、土合敦彦、岡田貞夫、安川英利、本片山数雄、木津直人、広瀬俊雄、徳田昌久、宮原巍、石川一郎、岸田達明、杉山敦雄、茂呂嘉之、田村幸英、山本修、草柳洋一、原田洋、船田良、家口寛、高橋成人、松谷眞一、岡本憲、土居淳志、吉田隆宏、小川譽芳、杉村直樹、松原正、玉虫誠、野澤隆一、松澤利幸、遠山誠、片岡滋樹、竹下徳二、鈴木俊雄、佐藤馨、佐々木英一、高橋謙一、睦田靖雄、黒木邦夫、5000円 藤井邦昭、高緑繁伸、井本重喜、松野豊、関勝、高澤誠、森山勇、2000円 鈴木弘之

寄付金合計

108万7000円

資料映像委員会

アーカイブ映画『カンチェンジュンガ縦走(1984年)』の上映とトーク会

当委員会が所蔵するアーカイブフィルム作品の中の「カンチェンジュンガ縦走(1984年)」を、去る2月19日にルームで45分間上映した。日本テレビにより制作されたこの作品は、日本山岳会80周年記念事業の一環として行なわれた31年前のヒマラヤ遠征の記録である。解説を隊のチームリーダーとして活躍された重廣恒夫氏にお願い



解説を担当された重廣恒夫氏

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

いした。司会進行は、荒井真二資料映像委員長が務めた。出席者は、解説者のパワーポイントを使った分かりやすいプレゼンテーションで、数々のエピソードに聞き入った。

この時代のヒマラヤの高峰登山は、初登頂が次々と達成され、縦走登山が主流になっていた。すなわち極地法からアルパインスタイルへの移行期で、高所登山は両方のミックスも取り入れられた。日本山岳会が1976年に、世界初のナンダ・デヴィ主峰(7816m)と東峰の縦走を成功させた実績により、そのときからの隊員たちの参加や経験が、カンチェンジュンガ(主峰8598m)の峰々の縦走に心強い原動力になるだろうと思った。計画は南峰、中央峰、主峰を3チームでそれぞれ登頂し、縦走隊のサポートのための荷上げを行なう計画を立てた。したがって、人数や物資も大規模になり、資

金調達は困難を極め、ハンググライダー飛行の計画を加えることにより、読売グループからの後援で無事準備が整った。登山はベースキャンプまでの長いキャラバンの末、若手を中心とした登攀隊員23名、ハイポーター35名、学術や報道隊員を含めると総勢77名の大所帯を、緻密な鹿野勝彦隊長が統括した。重廣チームリーダーは、前進基地に陣取り、ルート工作や各隊のハイポーターの配備、荷上げ計画の調整を行なった。

7800m地点からのハンググライダー飛行は世界で初めて。プロスキーヤーの只野直孝隊員が19分間飛び、無事成功させた。縦走隊2名(和田城志・三谷統一郎隊員)は、行く手の難関と戦いながら8500mライン3峰を世界初縦走した。頂上からのビデオカメラ撮影は、報道隊員に代わり南峰から中央峰を縦走した重廣隊員が行なった。極寒のなか、ビデオテープが凍らないように寝袋の中で抱いて寝た。橋本龍太郎総隊長は、自身の忙しい日程にもかかわらずヘリコプターでBCへ飛び、隊員を励ました。

また、報道隊員の岩下莞爾ディ

レクターと中村進カメラマンは、日本山岳会が1988年に行なったチョモランマ／サガルマータ日本・中国・ネパール三国友好登山で、頂上8848mから360度パノラマ実況中継を成功させたが、そこへ行く前の前哨戦になった今回は、テレビクルーとして参加していた。多くの優れたドキュメンタリー作品を制作した岩下名ディレクターは、次のような言葉を後輩たちに残している。

あるがままに撮ろう

あるがままに語ろう

在るものはあると言おう

無いものはないと言おう

無いものは在ると言っではない

在るものを無いと言っではない

ない

もう一度

あるがままに伝えよう

映画会の会場には、懐かしい小原俊隊員と、中央峰に登頂した大谷亮隊員も出席していた。上映終了後、参加者と重廣氏と語らう時間も有意義な時間であった。

【詳細報告は『山岳』1985年「カシエンジュンガ縦走」と会報『山』2006年8月号(No.735)

号)「日本山岳会におけるヒマラヤ登山連鎖の軌跡(1)」を参照」

(溝口洋三)

科学委員会

「活火山の安全登山」が大好評——フォーラム開催

フォーラム「登山を楽しくする科学(Ⅶ)」が3月14日(土)の午後に品川区大崎の立正大学キャンパスで科学委員会の主催で開催された。タイムリーでもあり、3講演の中でも「活火山の安全対策」が大好評を受けた。統一テーマでの開催は7回目。会場の大教室には約130人が集まり、最後まで熱心に耳を傾けていた。

トップは「白山を歩いて」。講師は長岡正利委員、富山県の出身で白山研究は大学、社会人を通じていわばライフワークだ。約400枚のスライドと該博な知識を駆使し白山火山の地質と形成史、花々山岳信仰、ライチョウ発見、山麓の暮らしから名物までたっぷりと言った。

次は安田昌弘講師による「天気予報と異常気象」。気象庁に勤務し南極越冬隊に参加、退職後も気象



立正大学キャンパスで行なわれたフォーラム

協会で防災の専門家として活躍している。経験から天気予報の精度は90点以上と自己採点、異常気象は30年に一度以下の頻度で起きる気象現象で、温暖化もあり、統計結果では激しい気象現象は増える傾向にあると解説した。

最後は福岡孝昭委員長の「活火山の安全登山」。記憶に新しい昨年9月の御嶽山水蒸気噴火から説き起こし、火山知識のイロハから噴火の種類と危険度を示した。活火山の安全登山では、情報の入手方法やマスク、ゴーグルなど必携の装備品をあげた。登山のリスクは自己責任と強調した上で、ヘルメットは常備品と結んだ。このテーマは関心が高かったこともあり、アンケートでは82%の人が「大変興味深かった」と回答した。

(米倉久邦)

自然保護委員会

平成26年度に起きた我が国の火山噴火に学ぶ

3月31日(火)6時30分より8時30分まで、自然保護委員会の主催による学術講演会、東京工業大学火山流体研究センター専任講師・寺田曉彦氏による「平成26年度に我が国で発生した火山噴火に学ぶ」が開催された。

日本は古来、火山国で世界の0・25%の面積に火山は7%を占め、火山列島と呼ばれるゆえんでもある。

災害も多いが数多くの温泉にも恵まれている。いわゆる深田百名山の中でも32座が活火山である。御嶽山は平成になってからでも7回噴火しており、今回の噴火は決して大規模噴火とは言えないが、行楽シーズン、晴天、週末、昼食時、無防備、至近距離の爆発という条件が重なり大惨事となった。

気象庁のレベル運用に国民が期待するのは噴火予測だが、期待されるほどの成果は上げていない。

平成26年度中に噴火したのは御嶽山、阿蘇山、桜島、口永良部島、諏訪之瀬島、西之島であり、この

うち阿蘇山については火山湖「湯だまり」が消滅すると噴火することが経験的に知られていたこともあり、噴火の予測も的中した。草津白根山、十勝岳、吾妻山は予測したが噴火せず空振りに終わったが、大学等による緊急学術調査や無人機によるガス観測等や観測網の整備等により学術的に貴重なデータが得られ、火山現象の理解は深まりつつある。

今のところ火山噴火予測の試みはうまく機能せず、このことが行政、報道、住民および登山者によく認識されず問題を複雑にしている面もある。今後、学術的に価値の高い地形や地質を保全し、教育や観光の面で活用する自然公園「ジオパーク」の認定を目指す取り組みも進められている。自然に対する理解を深め、自然への畏敬の念を育み、ひいては火山防災に生



講演会を行なう寺田曉彦氏

かそうする試みもあり、今後の動向に期待しよう。

今回の講演会には37名の聴講者に集まっていた。終了間際にも活発な意見や質問があり、講師の回答と解説にも熱意と意気込みが感じられ、素晴らしい講演会であった。2時間があつという間に過ぎてしまった。この後寿司屋での二次会にも16名が参加し、夜遅くまで議論が続けられた。

(下野武司)

集会委員会

雪の編笠山に登る

集会委員会から発信された「冬の八ヶ岳・編笠山に登る」の案内を知り、埼玉支部の小島千代美さんと申し込んだ。私にとって八ヶ岳連峰最南端にあるこの山は、2003年7月以来の再会である。当時は観音平からの日帰り山行だったが、今回はホテル八峯苑鹿の湯泊のうれしい企画である。

3月7日(土)、私たち二人組が小島車にて奥多摩、柳沢峠を越えて16時に宿に到着すると、7人のメンバーは先着していて、夕食は酒宴の懇親会となったが、翌日に



編笠山頂上での記念撮影

備えて早々に各部屋に散った。

3月8日(日)、夜からの小雨もやんだ曇り空の中、7時45分に車に分乗し、1340mの富士見高原リゾート駐車場へ移動する。集会委員の菊池武昭リーダーのもと登山口を8時過ぎに出発する。コ

寄付金および助成金などの受入報告 平成27年3月まで
(学生部遠征隊の募金の寄付を除く)

寄付者など	金額	寄付の目的、その他
気仙沼大島観光協会	25万円	高尾の森づくりの会・気仙沼大島「未来のさくら植樹プロジェクト」
国土緑化推進機構 “特定公募事業・緑化推進”	32万2000円	高尾の森づくりの会・三宅島復興支援緑化再生プロジェクト
京王電鉄株式会社	100万円	高尾の森づくりの会へ
森 武昭 会員	15万円	法人運営費用として
木元きよ 会員	1万5000円	日本山岳会へ
独立行政法人 青少年育成機構	588万円	家族登山WG・親子で楽しむ山登りWEBサイト構築 平成26年度一部
中大および日大OB会 員など計61名	108万7000円	ガンガブルナ北稜隊の募金。寄付者氏名はP.9参照

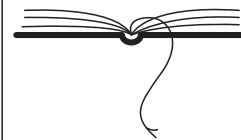
ースは盃流しから昔、修験者やマタギが雨露を凌いだ巨大な白久保岩小屋を経て山頂へ至る登山道である。標高を上げるにつれ銀世界に入り込りの樹氷を横目に、樹上から落ちてくる雪のシャワーを浴びながら、アイゼンもつけずに山頂まで歩く。なかなか森林限界を抜け出ることができず、天が開け、雪に覆われたハイマツ帯に出たときには気分が解放され、深呼吸する。

ひたすら登り続け、13時過ぎには全員が二等三角点のある山頂に到着した。雲の合間に青空も見え

たがガスが多く、周囲の山々は各々のイメージするところとなった。小柄な成瀬委員のご主人は、山頂に着くと「権現は見えませぬ」と一言あり、岳人としての深い思いを感じ取った。登山口へは16時に全員無事に下山し、宿で汗を流

し各々帰路に着いた。小淵沢インターに入る前、夕方の雲の上に姿を現した八ヶ岳の山々の麗姿に、言葉を失った。
集会委員の皆様と、同行してくださった方々に心からお礼を申し上げたいと思う。(宮川美知子)

図書紹介



上田 剛著 ウェストンと歩く日本アルプス ―古き絵葉書より―



2015年3月
里文出版刊
A5判 119頁
定価 2000円＋税

著者は奈良県出身の関西絵葉書研究会会員で、百年前の絵葉書の世界を研究する会「914ギャザリング」を主宰する方だ。甲南大学文学部教授で、イギリス文学者の

中島俊郎氏の序文には、「著者はウェストンを私淑することにかけて誰にも劣らない。本書にはウェストンに対する敬仰と愛情が溢れている。ここには、明治から大正にかけて日本アルプスの峰々を踏破したウェストンの足跡が忠実に再現されている。」とある。

ウェストンを研究した人は多く、その本も多いが、彼が登ったところの日本の山の様子を絵葉書だけを中心にとめた本は珍しい。絵葉書を見ながら解説を読むと、ウェストンが登ったときの情景が目

浮かんで臨場感を覚える。所々では、その絵葉書の場合でウェストンが思ったり、感じたりしたことを想像して、同時にタイムスリップさせた現代の山ガール二人との会話の形で書かれているのも一興だ。山を巡る環境や人は変わっても山そのものはほとんど変わらず、百年前までの景色は戦後もしばらくは残っていたので、昭和・一桁世代にとって大変懐かし絵葉書が多い。

若い読者にとっては、ウェストンによって開拓された日本アルプスの登山ルートや、山を巡る人々の暮らしや交通手段など、当時の様子が分かるので、本書はまさに日本のスポーツ登山黎明期博物館といえようか？

ウェストンが日本を去ってほぼ50年後の、戦後に起こった日本の登山ブームのころの山頂や休憩所はゴミの山だった。自然に帰る素材で作った物で囲まれた日常生活から、不用品は野山に捨てるのが大衆の習慣だったのだろう。昭和40年代の中ごろ、オーストリア人を案内して北岳に登ったとき、ゴミの山に半分埋もれている太い角柱に「ゴミは捨てないで持ち帰りましょう」と大書されているのが、

日本文字をある程度読めた彼に見付かり、写真に収められてしまったのは恥ずかしい限りだった。今ではゴミはすっかり影をひそめて美しい自然に戻ったが、指導標や鎖に梯子、山小屋まで整備された山に登りながら、ウェストンの時代に思いを馳せるのもよいのでは？ と思う。

(織方郁映)

アメリカ自然思想の源流

柴崎文一編



2014年10月
明治大学出版会刊
四六判・上製 320頁
定価 3000円＋税

地図帳でアメリカを眺めてみる。日本の何十倍という大陸に、山あり谷あり砂漠あり、広大な自然が満ちている。400年前にヨーロッパから新天地を求めてやって来た清教徒たちが、この自然に立ち向かったのだ。そこにアメリカの自然思想の起源がある。

実は著者はアメリカの自然思想は専門領域ではないと言う。では、なぜこの書を著したかというところ、在米中にエマソンやソローの著作

および解説書を読んだ折に、「エマソン研究におけるソローの自然観の捉え方」、一方で「ソロー研究におけるエマソンの超越主義の理解」に違和感を覚えたからだ、と「あとがき」に記している。したがって、この二人の作品を多く引用し、ソローがエマソンの思想の後継者だと見做されがちだが、エマソンの超越主義的自然観はソローに大きな影響を与えてはいない、との考え方を示している。

構成的には、ソローらに先立つ思想家として、野性動物画家として知られるオーデューボンをまず取り上げ、エマソン、そしてソローの生い立ちや自然思想を多くの作品を紹介しながら語っていく。最後にミューアを取り上げて、アメリカ特有の自然観形式のプロセスを見る形となっている。

アメリカの自然思想形成のプロセスを考えると、人里に隣接した自然の豊かな多様性を見つめ続けたソローによる「フロントカントリー」の思想と、厳しい原生自然の中で、荒々しくも繊細な野生の姿を追いつめたミューアによる「バックカントリー」の思想の両面をもつて、独自の世界が創り上げられ

図書受入報告(2015年3月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
上田剛	ウェストンと歩く日本アルプス : 古き絵葉書より/関西絵葉書研究会叢書	120p/21cm	里文出版	2015	出版社寄贈
イヴォン・シュイナード 他	Climbing Fitz Roy 1968 : 失われた第3登の写真についての覚書	136p/24cm	バタゴニアブックス	2013	購入
権藤司(編)	山から始まる自然保護 : 山の自然学クラブ会報(第14号)No.14	194p/30cm	山の自然学クラブ	2015	発行者寄贈
溝手康史	山岳事故の法的責任 : 登山の指針と紛争予防のために	89p/21cm	ブイター・リュージョン	2015	著者寄贈
P.パーカー(編) 藤原多伽夫(訳)	ヒマラヤ探検史 : 地勢・文化から現代登山まで	353p/22cm	東洋書林	2015	出版社寄贈
田口計介(編著)	駒ヶ岳とウマの百科 : 駒ヶ岳ファンクラブ創立25周年記念	171p/26cm	駒ヶ岳ファンクラブ	2014	著者寄贈
野口冬人	山書積ん読	225p/21cm	日本山書の会	2014	著者寄贈
塚本良則・塚本靖子	老夫婦だけで歩いたアルプスハイキング : 氷河の地形と自然・人・村	394p/21cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
池田常道	現代ヒマラヤ登山史 : 8000メートル峰の歴史と未来(ヤマケイ新書)	285p/17cm	山と溪谷社	2015	出版社寄贈
谷口敏子	山の小守歌 : 谷口敏子歌集	206p/19cm	谷口敏子(私家版)	2015	著者寄贈
大津雅光	探鳥の山旅	356p/22cm	白山書房	2015	出版社寄贈
JMA(日本山岳協会)	Mountaineering in Asia : UAAA 20th Anniversary	34p/27cm	UAAA	2014	編者寄贈

てきたと著者は主張する。エマソンの思想は、本質的な役割を果たしていないということである。そこがこの著作で訴えたかった点であると思う。源流はソロ以前に滴り落ちていたが、目に見える流れとしたのはソロであり、さらに大きな流れとしたのがミューアと例えてはどうか。

自然の有り様によって自然観も変わるものだと思う。日本でも山を神と見立てたり修験道のような考えがある。一方で自然を優しく捉えた古典や文学作品も多い。ソロの作品を読みながら、そんな対比も感じた。(荒井正人)

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会共編 BERG 2015



2014年10月
Tyrolia-Verlag刊
21.5×26.5cm 256頁
18.90€

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会の合同年報。例年の付録地図付きの山域特集はツィラーターラー・アルペン。3年前からのフ

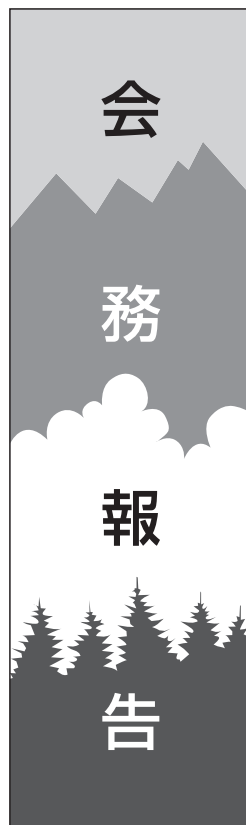
オーカス・登行・人・知識・文化に分けられた各章に5、6点のエッセイやルポを配する編集に変わりはないが、今年号は歴史に重点が置かれている。登山史に関心のある会員にとってBERGのこの号は必読であろう。

「外国山行―探検―遠征」を主題とする今回の「フオーカス」には、「ツウリズムの歴史と理論」「旅の文化史」「シュラーギントワイト兄弟のインド・高地アジア探検」「遠征登山の歴史」を論じる記事が並んでいる。

また「文化」の主題は戦争に関する登山の歴史で、そこに掲載されたエッセイのタイトルは「山岳戦における山岳会」「神、皇帝、祖国のためのスキー。ヨーゼフ・プロハスカと第一次世界大戦」「大舞台としての戦争。従軍記者アリス・シャレク」「山岳戦とその展示。ミュンヘン山岳博物館の戦時史料蒐集」。人の章に収められた、死後百年を迎えるユリウス・バイヤーの評伝「オルトラー・アルペンならびにアダメツロとプレサネツラ山群の偉大なる開拓者」、知識の章の「150年前に始まった山岳会の地図作製」も、歴史特集としての

今年号のテーマの一環であろう。

この山岳地図作製の歴史と並んで、従来の古き良き地形図と連携してGPSやスマートフォンなどを駆使する新たな登山情報システムを、独・奥・南チロル山岳会の



サービスとして開発したという記事(「21世紀のツアープランニング」が私には興味深かった。未知の探究としてのアルピニズムの時代は、遠く過ぎ去ってしまったようである。(平井吉夫)

平成26年度第11回(3月度)理事会

議事録

日時 平成27年3月11日(水)19時～20時55分

場所 日本山岳会集會室

【出席者】森会長、節田・黒川・古

野各副会長、高原・吉川・

佐藤各常務理事、勝山・山

田・野口・大槻・落合・川

瀬・山賀・直江各理事、吉

永監事、浜崎監事(注 落

合理事は所用のため審議

事項1～4は欠席)

【審議事項】

1・平成27年度事業計画書・予算

書案について

平成27年度事業計画書・予算書案について、別添資料により審議し、文言の一部追加修正することとした。(賛成14名、反対なしで承認) 2・「海外登山基金」の取崩しについて

日本山岳会110周年記念事業の内、平成26年度中に海外登山等への助成金として支給した資金に充てるため、海外登山基金から630万円を取り崩すことについて、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

3・北海道支部50周年記念募金承認願について

北海道支部から支部設立50周年記念事業のため、120万円を目標として募金を行なうことについて申請があり、別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

4・C-16 資料の貸出しに関する規程」の改正について

資料の貸出しについて、前回理事会で審議承認された「理事職務権限規程」により理事会から業務執行理事に権限が移されたことに伴い、規程の該当部分を改正することについて別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

5・次期(平成27年度～28年度)人事(理事)について

標記に関して、次に記す理事候補者について審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

【理事候補者】

《再任》吉川正幸(7345)、勝山康雄(8772)、山田和人(9909)、野口いづみ(12105)、大槻利行(13019)、佐藤守(13431)、落合正治(13517)、山賀純一(14660)、直江俊式(14775) 《新任》大久保春美(7249)、小林政志(7915)、神長幹雄(9722)、中山茂

樹(11319)、星征雅(14837)、谷内剛(14951)以上15名

6・入会希望者承認について

19名および1団体の入会について、別添資料により審議した。(賛成15名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・日本山岳会の「日本山岳レスキュー協議会」への加盟について(黒川、川瀬)

遭難対策委員会担当理事から、別添資料に基づき説明を受け協議を行ない、同協議会の組織運営、当会が加入することのメリット等について、追加資料の提出を求め継続協議とした。

2・集会委員会の名称変更について(勝山、高原)

集会委員会から名称を「山行委員会」に変更したいとの申請があり、名称変更に伴う委員会活動の目的・内容等について、継続協議とした。

【報告事項】

1・(公財)黒部市国際文化センターから、北陸新幹線開業記念特別展に使用する「冠松次郎」の資料について借用願があり許可した。

Climbing&Medicine・67

打撲・捻挫にはアイシング



浜口欣一

登山をはじめスポーツには、思わぬケガがつきものである。ケガをしたときに応急処置をするかしないかで、その後の治癒と結果が大きく異なってくる。

今回は、日常遭遇する打撲・捻挫の応急処置として重要な、アイシングについて述べてみたい。

ケガをした場合、出血、腫脹、疼痛、血管や神経の損傷を防ぐため、ケガした部分を安静(Rest)にし、腫脹を抑えるために氷や冷水により冷却し(Icing)、内出血や腫脹を防ぐために弾性包帯やテーピングで圧迫し(Compression)、腫脹を防いだり軽くするためにケガした手足を挙上する(Elevation)。これがRICEと呼ばれる応急処置である。この中の一つがアイシング(Icing)である。事例を紹介する。

筆者は何年かぶりで新調した山スキーを携えて、上越の東谷山に出かけた。傾斜がきつくなるに従って左足のスキーが頻回に外れてしまう(ビンディングはTLTでトップが登高モードでなく滑降モードであったことを後で知った)。板を履く度に斜面での微妙なバランスを保持するのが大変になり、かなり大腿部に負荷がかかった。頂上間近という場所で、左足のスキーが外れ、バランスを崩して転倒、10mほど滑落してしまった。ケガはしていない

ようだが、右大腿部が多少痛かった。登頂を諦め下山することにした。同行者が、スキーを担いで下りるより、履いて滑った方が楽であると言うのでトライしてみた。立木の少ない斜面を滑降してみたが、右足の踏ん張りが効かないのでスキーを脱いで担いで下ることにした。しかし、右足が思うように動かせず、4、5歩あるいては一呼吸しなければならぬ状態。大分時間がかかってしまったが、なんとか駐車場まで戻った。宿に戻って右大腿部を見ると、パンパンに腫れて、打ち身による内出血、青アザが見られた。転倒時に立木に衝突したのだ。すぐ冷凍庫に保管してあったアイスノンに密着させて冷やし、タオルで縛って圧迫した。アイスノンの冷たさは全く感じなかった。受傷後4日目に整形外科を受診したところ、X線撮影で大腿骨に骨折がないことが分かった。特別な治療は不要で、時間の経過を待つしかないとのこと。10日目ごろからケガした部位の緊張感は軽くなってきたが、膝を中心に浮腫が出現、やがて下肢に浮腫と出血斑が移動した。3ヶ月経った段階で下肢の浮腫は完全に消失していないが、大腿部打撲に関しては、後遺症はない。初期のアイシングのお陰と判断している。野口いづみ先生は、日本山岳文化学会、日本登山医学会で、黒部上廊下で仲間が足首の捻挫をしたが、テーピングと繰り返される徒渉での沢の水によるアイシングで、予定どおりの行動ができた事例を報告している。

今回、自験例および報告例は、打撲・捻挫のアイシングの重要性を示していると思われる。アイシングをするか、しないかで、ケガによる後遺症の程度が変わる。RICE、中でもアイシングをを記憶に留めておいて欲しいと思う。

写真は受傷10日目の下肢の足首で、浮腫、漏出性出血が顕著である。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご利用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

(節田)

2・富士吉田市教育委員会から、富士山にゆかりのある人物として「冠松次郎」の肖像写真の貸出し申請があり許可した。(節田)

3・110周年記念事業委員会から、別添資料により各プロジェクトの進行状況、110周年記念事業予算について報告があった。

4・会員増強・財政基盤検討PTから、別添資料により会員サービスのあり方、準会員(仮称)制度等の検討状況について、中間報告があった。(黒川)

(黒川、吉川)

5・募金、助成金等の事前申請3件、寄付金、助成金の受入れ7件について、別添資料により報告があった。(吉川)

6・『日本三百名山登山ガイド』著作権使用料に関する(株)山と溪谷社との覚書締結について、別添資料により報告があった。(節田)

7・平成27年度における新永年会員候補者について、別添資料により報告があった。(高原)

8・会費滞納除籍対象者(53名)について、別添資料により報告があった。(高原)

9・宮崎支部創立30周年記念誌刊

行に伴い、会員からの募金を行なうことについて報告があった。(吉川)

10・全国「山の日」協議会から示された、全国「山の日」フォーラム実行委員会に関わる規約、名簿等について、別添資料のとおり報告があった。(森)

11・自然保護委員長が、近藤雅幸会員から川口章子会員に交代することについて報告があった。

(佐藤、山田)

12・第1回JAC説明会を2月27日に開催したことについて報告があった。(高原)

13・JACマークの使用願いが、関西支部、宮崎支部、科学委員会から提出され、許可したことについて報告があった。(高原)

14・慶應義塾体育会山岳部創部百周年記念会参加の案内があり、森会長が参加するとの報告があった。(高原)

15・会報「山」3月号について報告があった。(節田)

【連絡事項】

1・NPO法人富士山測候所を活用する会から成果報告会の案内があった。3月22日(日)

第17回「秩父宮記念山岳賞」の推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第17回「秩父宮記念山岳賞」の推薦(他薦に限る)を次のとおり受け付けますので、事務局まで資料をご請求ください。

当会のHPを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式(ダウンロード可能)などをご参照ください。

多数の推薦をお待ちしております。

本賞は公益目的事業でありますから、受賞者を本会会員またはグループに限定していません。

- ◎対象分野 ・登山活動 ・山岳に関する文化的活動、学術的業績
 ◎提出先 日本山岳会内 秩父宮記念山岳賞事務局
 ◎締め切り 平成27年8月31日

2・(財)井上靖文学館からの企画展・講座の案内があった。3月22日(日)
 3・全国「山の日」フォーラム
 3月28日(土)～29日(日)東京国際フォーラム
 4・松本市立博物館からの「野鳥の切り絵展」案内があった。3月7日(土)～5月10日(日)

ルーム目誌
3月

【今後の予定】

1・宮崎支部創立30周年記念式典、交流登山および九州5支部集会
 7月11日～12日

2・平成27年度通常総会 6月20日(土)14時～ 主婦会館 プラザエフ

2日 総務委員会

3日 図書委員会 スケッチクラブ

4日 常務理事会 集委会員会

5日 YOUTH CLUB

6日 バックカントリークラブ

7日 海外委員会

8日 会員増強・財政基盤検討P

9日 T スキークラブ

10日 山岳研究所運営委員会 Y

11日 OUTH CLUB 九

12日 五会

13日 理事会 山想倶楽部

14日 フォトビデオクラブ 山岳

15日 地理クラブ

16日 スケッチクラブ

17日 総務委員会 資料映像委員

18日 会 二火会

19日 海外委員会 00会 スキー

20日 クラブ

21日 青年部 三水会 つくも会

19日 科学委員会 みちのり山の会 フォトビデオクラブ

20日 自然保護委員会 山の自然学研究会

21日 110周年記念(海外学術登山)

22日 登山

23日 デジタルメディア委員会

24日 支部事業委員会

25日 自然保護委員会 麗山会

26日 学生会 公益法人運営委員会 山遊会

27日 110周年記念事業実行P

28日 T 緑爽会 YOUTH

29日 CLUB

30日 YOUTH CLUB

31日 自然保護委員会

3月来室者 491名

会員異動(3月分)

物故

落合是明 (4430) 14・11・19

高田 誠 (4950) 15・3・3

鈴木一好 (10526) 15・3・3

退会

樋口宗一 (4612) 越後

江上 康 (4744) 福岡

山本恵志郎 (6287)

佐久間修 (6435)

廣田靖典 (6881)

大岩義男 (6933) 越後

山本聖二	(7288)	船橋 明	(12407)
藤間道徳	(7293)	福田澄子	(12429)
愛知俊之	(7324)	山本栄藏	(12682)
加賀谷昭一	(7502)	和田 昇	(12724)
西尾寿一	(7869)	持田 豊	(12930)
渡辺 健	(8250)	竹村重保	(12947)
山崎幸二	(8319)	毛塚一雄	(12951)
小松正志	(9136)	郡 成好	(12977)
加治川栄二	(9291)	広坂光則	(13358)
森 茂明	(9931)	橋本美和	(13514)
星野光一	(9956)	村上光鶴	(13594)
今井京子	(10041)	藤田晴紀	(13737)
古川沙朶	(10082)	横山洋子	(13804)
柏原一公	(10102)	芳村宗雄	(13964)
久我文子	(10128)	荒川龍治	(14011)
森田修示	(10189)	安藤しづれ	(14058)
榊原隆彦	(10208)	片桐康雄	(14192)
碓井健一	(10645)	伊藤利弘	(14328)
石田隆志	(10661)	月野鷹雄	(14346)
武内敏男	(10753)	平野一幸	(14691)
松尾良彦	(10843)	飯島文夫	(14803)
市 勝男	(11210)	原田嘉晏	(14872)
菅原達也	(11229)	田中政次郎	(14945)
原 幸多	(11437)	玉村和己	(15143)
二上 隆	(11560)	上野幹奈	(15178)
宮本紀美子	(11606)	清水智子	(15243)
石川耕春	(11631)	内ヶ島進	(15278)
久野菊子	(11794)	坂口健一	(15351)
等原紀子	(12126)	坂口詩織	(15352)
高橋 宏	(12332)		

I N F

O R M

インフォメーション

A T I N

◆第35回日本登山医学界(日本山岳会医療委員会後援)が高松で開催

日程 5月23日(土)～24日(日)
場所 高松市・サンポートホール 高松

内容 シンポジウムは「山の天候」、講演は「高山病診療ガイドライン」、公開討論は「山岳診療所」のほか一般演題もあります。市民公開講座「世界最高齢エベレスト登頂」を支えた日本の登山医学」で、三浦雄一郎氏が講演されます(整理券が必要です)。

費用 学術集金は参加費7000円(市民公開講座のみは無料)。詳細は第35回日本登山医学会学術集会HP (<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/tozan-2015/>)

◆新入会員のための企画「徳本峠越えとウエストン祭」

ウォルター・ウエストンの足跡 山研委員会

をたどり、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えて上高地入りします。上高地では山研に1泊して、翌日「碑前祭」に参加。新会員の仲間作りを手助けする企画です。

日程 6月6日(土)・7日(日)
費用 1万2000円(1泊2食、午餐会費、記念品代、傷害保険料)

定員 20名(26年度入会の会員および本会会員の希望者)

申込 5月23日(土)までに柴山信夫まで。

TEL 090-8331-4212

✉ jac-sanken@jac.or.jp

*現地集合・解散

*申込者に詳細案内を送ります。

◆八ヶ岳ツクモグサ探索

集会委員会

梅雨の合間に、八ヶ岳の横岳に登り、雪解け時に咲くツクモグサを探索します。茅野からタクシー

で桜平まで入り、硫黄岳・横岳に登ります。下山は、夏沢峠・本沢温泉からしらびそ小屋を経て稲子湯に下ります。時間があれば入浴して、バスで小海に出て解散します。軽アイゼンが必要です。梅雨の停滞前線が活発で、強い降雨が連続するような場合は残念ながら中止します。

日時 6月13日(土)～14日(日)

集合 13日(土)9時15分 JR中央線茅野駅集合

解散 14日(日)16時30分 JR小海線 小海駅

宿泊 硫黄岳山荘

費用 1万4000円

定員 15名

申込 5月22日までに、征矢(そや)二樹

TEL 080-35558-3250

FAX 03-3770-4228

〒syukai@jac.or.jp

申込みの方には詳細の案内を送ります。

◆白神山・地・ブナ林再生事業と自然観察会 青森支部

世界遺産・白神山のバッファゾーン周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するための除伐や

植樹などの作業、および原生ブナ林の観察会を行なう。寝袋、食料必携。テントはこちらで用意可。

日程 6月27日(土)～28日(日)

集合 27日8時JR弘前駅城東口および10時30分奥赤石林道ゲート

解散 28日15時奥赤石林道ゲート、17時弘前駅送迎可

経費 なし(食料、保険は各自持ちで)

定員 50名

申込 ハガキ、FAX、メールで須々田秀美宛 〒0361

0103 平川市本町北柳田96-2

FAX 0172-447237

〒hsusuta@gmail.com

6月14日までに

◆2015自然保護全国集会 自然保護委員会

東京多摩支部と共催で日本山岳会自然保護50周年記念集会を兼ねて開催。

テーマ「日本山岳会の自然保護活動を振り返り、これからを考える」

日程 7月11日(土)～12日(日)

場所 東京都青梅市

宿泊 青梅市「かんぼの宿 青梅」(前夜泊も可)

●第1日 集会

・支部報告

・基調講演(未定・現在検討中)

・日本山岳会の自然保護活動の歴史についての講演とパネルディスカッション(日本山岳会自然保護活動のこれからについて)

・懇親会

●第2日 フィールドスタディ

①御岳山ーロックガーデンー大岳山コース

②高尾の森見学コース

③青梅・五日市辺りの里を検討中

費用 11～12日(1泊)1万5000円(フィールドスタディの交通費は別途)

申込・問合せ 5月31日までに、氏名、住所、電話、12日の希望コースを明記し、ハガキ、FAX、メールで川口

章子宛へ 〒274-0063 船橋市習志野台4

43-1102

FAX 047-463-8721

〒syukai@pony.ocn.ne.jp

*申込受付後、詳細送付します。

◆編集後記◆

●山研の新管理人、元川里美さんが、短く控えめな文章を寄せてくださった。10数年以上高地で働くなかで、自然から授かった感性と自分のあり方について触れてある。かように自然に親しみ、行動できたらどんなに素晴らしいだろう。

●「山の日」というのは、祝日を周知させるのが目的ではなく、山、登山への理解を広め、登山がスポーツ、文化として根付くことが目標ではないだろうか。元川さんのような自然を慈しむ感性には、山への理解に通じるものがある。巻頭記事で江本嘉伸さんが書いた行動する意思もまた、登山の精神と同質のものだ。こういった文化の土壌を作るのは一朝一夕では成らず、継続した取り組みが多方面から必要となるだろう。(柏 澄子)

日本山岳会会報 山 839号

2015年(平成27年)4月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 森 武昭
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社